



倉本聰
コレクション
12

浮浪雲 (1)

scénario
1978
倉本聰

倉本聰
コレクション
12



理論社

KURAMOTO SOH COLLECTION 12

浮浪雲 (1)

1983年12月 第1刷

著者／くらもとそう倉本聰©

発行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町15-6

電話 (03)203-5791

振替 東京9-95736

1983 Printed in Japan／0393-91612-8924

誠和印刷／島田製本

倉本聰作品

ジョージ秋山原作より

浮
浪
雲
(1)

テレビ朝日
石原プロモーション 制作
昭和53年4月2日～5月28日放送

装画・題字

装幀

小野州一

杉浦範茂

いの章

雲の家・縁側

カメラのほうに背中を見せて、庭を見ている浮浪雲と妻のかめ女。

チツチツと鳥の声。

かなり長い間。

雲「(ポツリ)春ですねえ」

かめ「春でございますねえ」

長い間。

雲「まだ冬ですねえ」

かめ「まだ冬でございますねえ」

長い間。

雲「やっぱしどう見たって春ですねえ」

かめ「やっぱしどう見たって春でございます」

間。

雲、ゆっくりとかめをふり返る。

かめ、目を伏せる。

雲、また庭を見る。

鳥の声。

雲「やっぱしこいつアまだ冬ですよ」

かめ「――」

雲「ねえ」

かめ「――」

雲「――(ふり返る)ねえ」

かめ、目を伏せたまま、必死に小さく。

かめ「春だもん」

桃色の画面

タイプがカタカタと文字を打ち出す。

「このドラマはフィクションであり、時代考証その他、かなり大幅にでたらめです」

タイトル流れて。

*

夢屋・表・道

女の足が次々と通る。

かご脇に坐って冷やかしている雲助たち。

熊「よオよオ姐ちゃん色っぱいよッ」

寅「しびれるよッ」

辰「——」

熊「いいよッ、そのえり足たまないよッ」

寅「寄ってかないッ!!」

ツンと通って行く通行の女たち。

三次「いよッ。いい女ッ」

小吉「顔がなけりやアもつといいよッ」

フラッの中から出てくる雲。

雲助たちと並んで坐る。

タイプ、打ち出す。

「程良き幕末

品川宿」

熊「よッ。ホクロッ。そのホクロいいッ」

寅「最高ッ」

三次「色ばくろッ!!」

定八「七十五点ッ!!」

また別の女来る。

熊「いよーッおばさんッ。元美人!!」

三次「老けすぎッ」

小吉「五十二点ッ」

突然、雲ピーツと指笛を吹く。

ギョッとふり向く一同。

雲、やってくる女を指して、

雲「姐ちゃん最高ッ。九十三点!!」

小吉「甘いッ、八十六点ッ!!」

三次「八十七点ッ!!」

寅「八十八点ッ!!」

熊「もう一声ッ!!」

雲「九十ッ!!」

熊「九十が出たよ後ないカッ!!」

定八「売ったッ!!」

熊「九十で頭がしらに落ちました。次ッ」

辰「アレッ（と指す）」

雲「九十五ッ!!」

三次「甘いッ。五十二ッ」

熊「五十六ッ!!」

雲「八十ッ!!」

寅「七十ッ!!」

熊「七十で寅ッ。次ッ!!」

雲「(指す)アレッ!!」

三次「三十!!」

寅「三十一!!」

雲「八十二ッ!!」

欲次郎の声「(狂乱)やめろ——ッ!!」

しんとする一同。

欲次郎「(興奮)何ですか頭まで柄の悪いッ!! あんたは

ここの頭なシですよ!!」

雲「ハイ」

夢屋・帳場

欲次郎と雲。

欲次郎「ほんとうにしつかりしてくださいよう!」

雲「あちきはしつかりしてますよ」

欲次郎「何をすつとばけてアチキですか! 私やもう頭を

見てますとね、ほんとうにいらいらしてくるンですよ

ッ。私がいなかったらこの問屋場はいつたいどうなる

と思つてンです! ま、いいや、とにかく大至急ね、

品川屋さんまで行つてください」

雲「あちきが行くんですか」

欲次郎「そうです! アチキが行くんです! 勘定奉行の

青島様がね、お金を持ってみえてますからね」

雲「お金」

欲次郎「ホラ、例の街道の補修工事に人足を出したそのお

金ですよ!」

雲「ほう」

欲次郎「いいですか、きちつといただいてくださいよ!

うちで出した人足は五十人で十日分。よろしゅござい

ますね五十人の十日ですよ! 役人はすぐごまかしま

すからね。

キチツと。必ずキチツとですよ!」

辰「(入る)とつつあん、荷の数合わねえよ」

欲次郎「(立つて外へ)ああもうッ。文次ッ。大吉ッ!!」

品川屋(旅籠)・一室

勘定奉行青島の顔。

青島「あの街道区間は、道の悪さに旅人が難儀致してお

たが、このたびの補修工事のおかげで通行しやすくな

ったと、きわめて市民に好評である」

莫をすつている雲。

青島「人足の手間賃だ。受取るがよい」

部下がふくさを解き、積まれた小判を雲のほうへ押し出す。

雲。

——目で数える。

青島。

部下。

雲「ン？」

雲、青島を見る。

じつと見返す青島。

部下。

雲。

——今度は手で数える。

間。

雲「五十人かける十日分でやしたね」

青島「（うなずく）さようである」

間。

雲「十日分ありますか」

青島「九日分しかない」

雲「ハハア！」

間。

青島「残りは私が預っている」

雲「（馬鹿に感心して）ホウ！」

部下のインサート。

間。

青島「次の仕事もお前のところでやってもらおうと思っ
ている」

間。

雲「なるほど」

間。

青島「おまえのところに入札させるには、いろいろとまア

——アレである」

間。

雲「なるほど。アレですか」

青島「アレである」

雲「なるほどねえ！」

間。

青島「理解できたか」

雲「できやした」

青島「うむ」

雲「なるほどアレかア。アレだったのかア」

ふくさの上の金。

欲次郎の声「それで！ 帰ってきちゃったンですか！」

雲の声「ハイ」

夢屋・帳場

欲次郎と雲。

二人の間に件くだんの金。

欲次郎——何かいおうとするが、怒りに逆上さか上して声も出ない。

欲次郎「いくらお武家の出だからっていったって、このくらいのことわかると思うんだ！」
金をしまう。

欲次郎「こういうことが積み重なって、構造汚職に発展するんだ。全く日本はどうなるんだ!!」

雲「行つていいですか」

欲次郎「勝手に行つたらいいでしょう!」

雲、フラツと立つ。

欲次郎「ああ! 大和町の間屋場から、来てくれ来てくれ
つていわれてるんだ。行っちゃおうかなアあっちの店
へ。(急に) ちゃっと!」

雲「ハイ?」

欲次郎。

欲次郎「今の音、何です」

雲「——音、しましたか?」

欲次郎「——」

欲次郎、雲をサツとつかまえ懷を探る。

小判が出てくる。

欲次郎「(見る) こいつア何です!」

雲「——」

欲次郎「この金ア何です!」

雲「——」

欲次郎「八日分しかくれなかったっていうが、ここにもう
一日分ちようどありますね」

雲「これはアレですよ」

欲次郎「アレとは何です」

雲「だからアレですよ」

欲次郎「だからアレとは」

雲「私の、アレです」

欲次郎「頭」

もめつつける二人に、新之助の声しのびこむ。

新之助の声「私の父上は雲助の頭である。元は武士だった
がその身分を捨てた」

塾

作文を読んでいる新之助。

（青田先生と塾生たち）

新之助「（つづけて）私の父上がいなければ東海道一万の雲助は動かず、たちまち日本の交通通信はマヒすることになるだろう。父上は一見何もせず、フラフラ遊んでいるように見える」

神社・境内

もつれるように急ぎ来る数人の子どもの足。

新之助の声「（つづく）しかし、私は父上のことを、日本

一の人だと尊敬しており」

子どもの足止まる。

子1の声「でたらめばかり作文に書くなよ」

不良少年（塾生）五名に囲まれている新之助と、親友

福之進。

子2「おまえのおやじが日本一だって？」

福之進「よせよ」

子3「うるさい！ お前はひっこんでろ！」

福之進「（つきとばされて）何するンだよ！」

子1「（新之助の鼻をひねる）オイ、秀才」

新之助「ボク秀才じゃないよ」

子1「極楽とんぼって言葉知ってるか」

新之助「知らないよ」

子1「おまえのおやじは極楽とんぼだ」

子2「お前のおやじってスケベエなんだってなア」

子3「昼間っから女の尻ばっか追っかけてよ」

子1「あれでよく雲助の頭がつとまるよな」

子2「女の着物なンか着ちゃってな」

子4「帶たらしってよ」

子5「まげなンかこうでよ！」

子2「よオ姐ちゃんあちきと遊ばない!？」

新之助、懸命にふりほどいて逃げようとする。その荷物を取って放り合う不良ども。新之助懸命に奪い返そうとする。

新之助「返してよ！ ねえ！」

子4「ホラ」

子2「とってみな！（放る）」

子1「ホラ！」

子3「とってみな！」

子2「極楽子とんぼスーイスイ！」

子どもら「（合唱）眼鏡をかけてスーイスイッ」

道

新之助と福之進、グイグイ歩く。

今にも涙がこぼれそうに傷ついている新之助。

福之進「（急ぎつつ）気にしないほうがいいよ。ねえ！

ほんとにあんなやつら、気にしないほうがいいよ！」

雲の家・居間

ぐんぐん横切る新之助と追いかめ女。

かめ「どうしたんですか！ ねえ、新之助！」

新之助自室へ入り、ピシヤンとふすまをしめてしまう。

新之助の部屋

後ろ手にふすまをしめ、じつと立つた新之助。

その目にこらえていた涙があふれる。

新之助、机の所へ行つて辞書を出し、引く。

辞書

めくられる。

字が出る。

「極楽とんぼ

『何もしない、気楽な人』

部屋

新之助。

その顔に、

——遠くからしのびこむお茶屋の狂騒。

「ジャンケンポンッ。あっち向いてホイッ。こっち向いてホイッ」

お茶屋

遊び人、芸者たちにはやされつつ、脱ぎっこしている雲と芸者のおちよう（すでに長じゅばん）。

二人「ジャンケンポンッ。あっち向いてホイッ。コッチ向いてホイッ。アッチ向いてホイッ!!」

歓声。

雲、負けて帯を解く。

二人「（また開始）ジャンケンポンッ。アッチ向いてホイッ。こっち向いてホイッ!!」

拍手、歓声。

おちよう負けて、つけまつげをとる。

二人「（再開）ジャンケンポンッ。あっち向いてホイッ。こっち向いてホイッ。あっち向いてホイッ。こっち向

いてホイッ!!」

歓声。拍手。

おちようまた負け、なぜか同じ場所からもう一枚つけまつげをとる。

二人「(再開) ジャンケンポンッ!!」

今度は雲負け、着物を脱がされる。

拍手、嬌声。それらの声が――

お茶屋・表

その夜の暗がりに流れている。

月光のその川端柳の下に、じっとお茶屋の二階を見上げて立っている新之助。

「ジャンケンポン! あっち向いてホイッ。こっち向いてホイッ。あっち向いてホイッ――」

新之助の顔に、

音楽――低くしのびこむ。

新之助の部屋

背を向け、机に向って勉強している新之助。

隣室から洩れてくる雲の声。

雲の声「様子が変だって、何があったんですか」

同・居間

茶をいれているかめと雲。

かめ「あなたのことでいじめられたらしいんです」

雲「あちきのことで?」

かめ「はい」

雲「何をいわれたんですか」

かめ「あなたが極楽とんぼだって」

雲、飲みかけた茶の手を止める。

雲「(馬鹿に感心して) うまいことをいいますねえ!」

かめ「感心なンかしないでくださいましッ」

雲「いや、そりやなかなかうまい表現ですよ。(立って寝

室へ) 極楽とんぼ――なるほどねえ。ん?」

隣室

雲。

敷かれた布団に枕が二つ。

雲、一つの枕をとり、居間へ戻ってかめに渡す。その

まま新之助の部屋をのぞく。

雲「新さん、そろそろ寝ませんか」

新之助。

——無視して机に向っている。

雲「あんまりコンつめると体に毒ですよ」

新之助「——」

雲「そんじゃア、先に寝てますからね」

雲、ふすまをしめ、寢室へ。

枕を手にウロウロついて行こうとするかめ。

その前にビシヤリと閉じられる寢室のふすま。

松の木に

絵のように月がかかっておりまして。

どこかで火の番の柝しほの音が。

寢室

雲の横にちゃんと新之助が寝ている。

かめの寢室

かめ、ひとりで淋しく眠っている。

かめの夢

巨大な男の影の中に、かめおびえて後ずさる。

かめ「い、いけません！」

自ら帯を解きはじめる。

かめ「私は——私には——お、夫がいるンです！（解く）

そ、そんな！ あなた！（どンドン解く）ほんとうに

ダメッ」

どこか遠くで、ギャーッという悲鳴。

かめの寢室

はね起きるかめ。

寢室

新之助、父をゆり起こす。

新之助「父上！ 父上ッ。人の悲鳴が！」

雲「（眠ったまま）どつかで人が斬られたンでしょ（布団

にもぐる）」

新之助「父上ッ!!」

街道

切られた飛脚の荷をあさる数人の影。

ピーッ、と遠い呼笛の音に、サツと立ちあがり一方へ

消える。

飛脚の死体。

はんでんに染め抜かれた⑧の文字。
効果音——衝撃。

*

作業場

緊迫した顔の雲助たち。

定八「市蔵が切られた!」

辰「そうよ! 昨夜の三時頃よ!」

寅「辻斬かい」

辰「いや、ちがうぜありやア金アとらねえんだ」

三次「江戸に早飛脚頼まれてよ、とび出した途端よ!」

辰「盗まれたのア手紙だけさ!」

帳場

大吉「今年に入って三度目だぜとつつあん!」

小吉「一月に杵次、先月弥助」

大吉「こんなことじゃとつつあん恐ろしくってよ、おれら
早飛脚はごめんだよ!」

道

急ぎ足に来る文次と弥七。

文次「おれらが京都の勤皇派のよ、密書を持ってねえか疑
ってるんだろ!」

弥七「そんなことこっちは知っちゃいねえよなア!」

文次「中身なンか知らずに運んでんだ」

弥七「ああ」

文次「いちいち切られちゃたまねえよ!」

熊の声「(低く)とつつあん!」

帳場

ふり向く欲次郎。

熊「(耳もとに)どうやら下手人がわかったぜ」

欲次郎「何だと」

熊「三日前から、品川屋に柄の悪い侍が三、四人いるんだ」

大吉「何だそいつら」

熊「それがおめえ宿の女中にきいたらよ、新撰組のやつら
らしいって」

一同「(息をのむ)新撰組!」

作業場

定八「新撰組ってお前あの、京都のか!」